
元魔王と勇者vs魔王

ながれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

元魔王と勇者VS魔王

【Nコード】

N4362Z

【作者名】

ながれ

【あらすじ】

昔、元魔王は元勇者と賭けをした。六百年後、元魔王が再び異世界に再来した時世界アルスギニアには新しい魔王の脅威があった。

第一話 プロローグ1

「…はあ、…はあ……」

雨の降り頻る森のなかを一人の女性が息を切らしながら進んでいる。歳は二十にさしかかる頃だろう、まだ少女のようなあどけなさの残る容姿で街中を行けば十人がみれば十人がふりかえる美人だった。

しかし、肩から血を流し矢が生えた左足をかばいながら行くその痛々しい姿が全てを台無しにしていた。

「——私はどうなったって良い。…でも、この子だけは………」

彼女の名はシルファ・ファーク。

この世界アルスギニアを侵略し征服しようとした魔王を倒した勇者である。

そんな彼女が、なぜ死にかけているのかと言うとその絶大なる勇者の「力」を供給する教会から授けられた聖剣ベサルタが手元になくシルファ本人はそこまでの力を持っていないからだ。

だとしてもシルファは常人の数百倍の魔力をもっているがそんなモノで魔王は倒せない。シルファが魔王を倒せたのは単に聖剣ベサルタとの相性と偶然の重なりだけだったのだ。

そしてシルファは魔王討伐の旅の凱旋の折に教会にベサルタを返すその祝いのパーティーに出席し、毒入りの酒を——飲んでしまったのだ。

「なんで、…私は殺され、るんだ……」

「簡単だ。各国の王と教会が民衆の羨望のあつまる貴様を恐れたからだ」

シルファは自問した。そのはずなのに返す声がある。

(…どこ、かで聞いた…、声……)

シルファは周りを見渡すと先の大木に背をつけて腕を組む青年がいた。

「おま、えは魔王…!」

そう、どこにでもいそうな黒髪黒眼の容姿で見たことも無い服に身を包むあの青年は自らが倒したはずの魔王だった。

「驚いているな、あんな鈍い一太刀で幾多の世界を渡り歩いたオレを殺せたと信じ込むとは呆れたものだ」

魔王は不敵に嗤う。

「そんな、まさ、か…」

シルファは脱力し崩れ落ちた。身体に盛大に泥水がかかった。

(……私と、仲間達の…努力は無駄だったの、か……)

シルファの脳裏にともに戦った仲間達と途中で出会った人々の顔が

浮かんでは消えていく。

「成る程、マンティコアの猛毒にマンドラゴラの薬効成分を足すことで半端に苦しめて殺す毒か。教会もえげつのない真似をする」

いつの間にか近付いた魔王がシルファを見下ろし、感心したように頷く。

「ん？、勇者よ。貴様身籠っているのか」

そうなのだ。

シルファは共に旅をした騎士と恋におち、神から子を授かったのだ。その騎士も森に逃げる途中で囷となって離れてしまった。

魔王はしばし考え込み口を開いた。

「勇者、オレと賭けをしないか？オレはもうこの世界に用は無い。欲しい物は手に入れたからな」

魔王は手には一本の剣を持っていた。

シルファが教会に返したはずの聖剣ベサルタだった。

「――そこでだ。オレは六百年後、また一度この世界アルスギニアに来訪する。それまで貴様の血統が絶えていないのならオレがアルスギニアに平和をもたらそう。そのための前提として貴様と貴様の子を助けてやる」

悪い条件ではない。

でも、相手はあの魔王だ。信じられる訳がない。

「こっちだ！　勇者がいたぞ！！」

追っ手が来てしまったようだ。結婚を誓った彼はどうなってしまったんだろう。

「見つかったぞ。推測するに教会の異端討伐部隊だな。捕まれば命はまず無い」

自分はどうなっても良い。でもどうしてもこの子だけは助けたい、それこそ悪魔と契約してでも。

「分か、った……」

それを聞いた魔王は口の両端を吊り上げた。

「了承した。跳ぶぞ《ダークスプーダー失踪する影》」

聞いた事のない魔法と共にシルファの意識が消失した。

「ん…、朝？」

閉じた目蓋の裏側に光が差し込みシルファは目を覚ました。

（やっぱりあんなの悪い夢だったんだ。魔王が生きているなんてなんて悪夢だったんだろう）

シルファは上半身を起こしてベッドに座った。

「お目覚めのようだな、勇者」

「な、何者!？」

シルファはとっさに聖剣ベサルタを探すが無処にも無く、よくよく見れば寝ていた部屋も見慣れないものだった。

「貴様が気絶したものだから、魔王城に運び治癒呪文をかけ介抱してやったのだ。感謝しろ」

そうか、あの後私は気絶したんだ。それに言われてみれば身体の痛みも嘘のように消えている。

魔王にここは魔王城のどこだと聞こうと顔をむけた時、ふと視界に魔王の持つ手鏡が映った。しかし手鏡に写る顔はシルファのそれではなかった。

手鏡をひったくりもう一度よくみるがやはり、それはシルファの顔ではない。

「それは【オーダーメイド虚構の自画像】、映った顔の形から髪の色まで自在に変える手鏡だ」

今の、シルファの顔は銀髪銀眼の幻想めいた美人な女性に変わって

いた。

「な、なぜこんな事を…？」

「前の顔のままでは勇者だとバレて面倒になるからな。そのためだ」

魔王は一拍あけて、また喋った。

「そして、最後に貴様の記憶を消す」

物凄い勢いで魔王はシルファの頭を掴み呪文を唱えた。

それが、シルファ・ファーク、の見た最後の景色である。

とある村の入り口に一人の銀髪銀眼の女性が木によりかかるように眠っている。

それを一人の青年が数秒見つめた後、村の反対に向かって歩き出した。

「あの容姿では迫害の的だ。だが、彼女の血は魔力が高い。うまく使えば成り上がる事もできるだろう」

青年は嗤う。

「六百年後が楽しみだ」

青年が取り出したナイフで空を切るとそこから真っ黒な穴が出現し
青年はそこに消えていった。

六百年後 アルスギニア とある丘の上

空間が歪む。

その歪みは黒く染まっていき虚空に浮かぶ穴となりそこから一人の
青年が現われた。

「来てやったぞ。勇者」

第二話 プロローグ2

ネロニス教国に位置する神々への信仰の集まるとされる「教会」の本拠地、マスタリア大聖堂の地価の宝物庫に一人の影があった。

「二千年間、あらゆる世界を旅したオレにこの程度の妨害とは片腹痛い」

彼は周りの恐らくは一生遊んで暮らせるであろう聖遺物には目もくれずに長方形の箱を開けようとしていた。

それは高名な魔導師達が幾重いくえのダミー、呪いのトラップ、魔法による迎撃など少し間違えれば常人では即死レベルの箱なのだが彼はそれを易々と回避して箱を開けた。

その中に納められた剣は魔王……つまりは「彼」を殺したと思われるこの世界にふたつとない聖剣ベサルタだった。

「さて、この世界ともしばしの別れだ。魔王を一討伐したと思われる勇者らの祝宴でも見物するか」

そう言って彼は次の瞬間には宝物庫から消えていた。

時間は夜

「これより魔王討伐の功を為した勇者様とその仲間達を祝う祝宴を執り行う。皆、存分に楽しんでくれたまえ！」

勇者シルファ・ファークの出身地、メノキアス王国の王の言葉によりだっ広い会場が出席者達の声がこだました。

とは言っても、出席者のほとんどが高そうな正装に身をつつんだ上級貴族か各国の王ばかりだったが。

「実際、あいつらは貴族ではなく教会ご自慢の異端審問官なんだがな」

彼は今、会場となっているメノキアス王国王城の謁見の間から少しはなれた塔の屋根に座っていた。

彼には貴族達の動き方に無駄がなさすぎるのが見て解かった。それに彼らの眼のおくからは何の感情も伺えなかったのが決め手になった。

勇者シルファがどこかの王に勧め^{すす}られた酒のグラスを取り、飲もうとする。勇者の仲間だった女性の魔導師が止めに入るがもう後の祭りだ。

倒れ咳き込むシルファ。それを守る勇者の仲間達とそれを襲おうとする貴族に化けていた異端審問官達。各国の王は近衛に守られながら退出した。

「なかなか面白くなってきたな」

彼は懷から一冊の本を取り出す。それは別の世界で拾った怪物を呼び出すための魔書だった。

「召喚、『ナイトゴースト夜の魍魎』」

顔が無くコウモリの翼、長い尻尾、黒い皮膚をもつ人型の化け物が三体召喚された。

「勇者の敵を無力化しろ。後は好きにして良い」

三体の化け物は肩を震わせながら飛んでいく。

ナイトゴースト夜の魍魎は捕えた者を異次元に連れ去り、同盟関係の食屍人に食わせるのだ。

「オレの楽しみのために生き残れ、勇者」

どうやら無事に勇者は生き残ったらしい。ナイトゴースト夜の魍魎が間違いで勇者

の仲間の騎士を食屍人に食わせてしまったと弁明していたがたいした問題ではないだろう。

目の前に精魂尽き果てた風の勇者が倒れている。毒の酒を飲んでい
るのは分かるが体力の消耗がはげしすぎる。

魔道具で調べると勇者のほかに一つの魂があった。

「ん？、勇者よ。貴様身籠っているのか」

どうやら勇者も人の子、旅の道中に子を授かったようだ。

彼は一つの楽しみのための名案を思いついた。

「勇者、オレと賭けをしないか？オレはもうこの世界に用は無い。
欲しい物は手に入れたからな」

これみよがしに先ほど手に入れた聖剣ベサルタを見せてやる。

「――そこでだ。オレは六百年後、また一度この世界アルスギニア
に来訪する。それまで貴様の血統が絶えていないのならオレがアル
スギニアに平和をもたらそう。そのための前提として貴様と貴様の
子を助けてやる」

倒したはずの魔王の存在、奪われた聖剣ベサルタ、普通なら正常な
判断は下せない。

「分か、った……」

勇者は言った。

彼は自分の口の両端が吊り上るのを感じた。

「了承した。跳ぶぞ《失踪する影》」
ダークスビーダー

追っ手の足音と怒声の鳴る森から二人は消えた。

とある村の入り口に一人の銀髪銀眼の女性が木によりかかるように眠っている。

それを彼が数秒見つめた後、村の反対に向かって歩き出した。

「あの容姿では迫害の的だ。だが、彼女の血は魔力が高い。うまく使えば成り上がる事もできるだろう」

わざと彼はそのような容姿にしてやった。

次に訪れる千年の間に血は絶える可能性は十分にありえる。

だが、何らかの方法で良い意味で有名になった時、名だけでなく顔も瞬くまに広まるだろう。彼はそれに賭けてみたのだ。

「六百年後が楽しみだ」

彼は世界を渡るために使っているナイフで虚空を切り裂き転移門ゲートを開いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4362z/>

元魔王と勇者vs魔王

2011年12月20日20時51分発行